

## 三島由紀夫の小説『憂国』の文学性

澤田文男\*

### The literature nature of novel “憂国” of Yukio Mishima

Fumio Sawada

#### 要約

本稿は、三島由紀夫の小説『憂国』について、関係する他の作品、関係する史実も踏まえるが、なによりも作品そのものの分析を通してその文学性について考察するものである。

キーワード：文学性、現実、虚構、死、美

#### (Abstract)

About novel “憂国” of Yukio Mishima, this paper is based on other works involved, also historical fact involved, it is intended to discuss the nature of their literature through analysis of the work itself than anything else.

Key Words: Literature nature, Fiction, Nonfiction, Death, Aesthetics

#### はじめに

三島由紀夫は、小説『憂国』の映画化に苦心した様子を記した文章の冒頭で、

短編小説「憂国」は1960（昭和35）年12月号の「小説中央公論」のために書かれたものである。この小説は私にとっては忘れがたい作品で、わずか五十枚足らずのものながら、その中に自分のいろんな要素が集約的に入っている作品と思われるので、もし私の小説を一編だけ読みたいといふ人があつたらば、広く読まれた「潮騒」などよりも、むしろこの「憂国」一編を読んでもらへば、私といふ作家のいいところも悪いところもひつくるめて、わかつてもらへるやうに考えてゐる。それだけ愛着の深い作品であるか

\* 提出年月日2012年11月30日、高松大学発達科学部講師

ら、私はこの映画化の企画があることを知りながら、その企画に対してはいつも疑問を抱いてきた。

普通、長編小説を映画会社に売る場合に、私はむづかしい注文はださない主義で、映画といふ別的手段で自由に解釈されるままにまかせてきたが「憂国」だけはどうしてもさうしたくない気持ちがあった。

（「製作意図及び経過（「憂国 映画版）」1966（昭和41）年4月）  
（以下、三島の作品・その他の文章の引用は「三島由紀夫全集 新潮社 昭和48年発行」に拠っている。ただし、旧漢字は新漢字に改めた。）

と、小説『憂国』とその映画化について特別のこだわりを示している。

また、その2年後に記した文中でも、

「憂国」は、物語自体は単なる二・二六事件外伝であるが、ここに描かれた愛と死の光景、エロスと大義との完全な融合と相乗作用は、私がこの人生に期待する唯一の至福であると云つてよい。しかし、悲しいことに、このやうな至福は、つひに書物の紙の上にしか実現されえないのかもしれない。かつて私は、「もし忙しい人が、三島の小説の中から一編だけ、三島のよいところ悪いところすべてを凝縮したエキスのやうな小説を読みたいと求めたら、『憂国』の一編を読んでもらへばよい」と書いたことがあるが、この気持ちには今も変りはない。

（『「花ざかりの森・憂国」』解説』1968（昭和43）年9月）

と、同様の意を書いている。

こうした自らの文学の世界に言及した文章を書いたさらに2年後、1970（昭和45）年11月25日に、当時の陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地、東部方面総監部総監室で切腹を遂げた現実の行為が自然と重ね合わせられて（重ね合わせる危険は弁えつつ）、『憂国』は彼の思い深い作品ということになる。

ところで、文学の世界、現実の行為と記したが、『現代日本文学館』（文藝春秋刊）の第42巻の「三島由紀夫」集の評伝を書いた橋川文三に対して、三島はその礼状に、

此度は見事な伝記をお書きいただき、心から感謝しております。むかし『鏡子の家』

についてお書き下さった時、自分は三島の文学自体には興味がなく、精神的興味为主である、と述べられていたと記憶しますが、実はそういうアプローチのほうが小生が文学に賭け、あるいは文学を利用している（この二作用は同じことのように思われます）態度の根底にあるものを、正確に見抜いておられるという感を抱かされます。（後略）

と記している。

文学という虚構に賭け、虚構を利用して自らの現実の行動の根底にある精神を表現するという姿勢を理解されたものと訴えているわけであるが、とすれば『憂国』の世界と市ヶ谷駐屯地での三島の行為とそれに至る彼の営為とは虚実緋い交ぜの世界であるのだろう。そうしたところに三島文学を解く手掛かりとして多くのヒントが埋伏されていると考えるのは間違っていないだろう。同様に、先の三島自身の『憂国』に対する深い思いのこもる文章にも手がかりはあるものの、まったく信用するわけにもいかないだろう。

こうした「畏」にうまくかかるため、あるいは下手にかからないため、なにより大切なのは対象を文学作品として享受、鑑賞し、解釈することである。「歴史とは解釈のことである」（E・H・カー）ならば、「文学とは解釈のことである」と考えてもよいだろう。

#### 一 磯部浅一元陸軍一等主計の声

小説『憂国』は、三島の記しているとおりの「物語自体は単なる二・二六事件外伝」であるが、当然、時代や状況の設定は、史実の二・二六事件を背景として密接に関わり、主人公は青年将校そのものであることから、三島が関心を寄せている史実の青年将校について確認しておきたい。

三島には、「『道義的革命的論理』—磯部浅一元一等主計の遺稿について」（1967（昭和42）年3月）とのタイトルで、二・二六事件の「首魁」である磯部浅一元一等主計（以下、磯部と略記）の思考についてまとめた文章があり、また、「二・二六事件と私」の中にも磯部の「行動記」の一説を引用し、さらに小説『英霊の声』にも「獄中日記」の一節が用いられており、事件の主要な青年将校のうち、磯部こそが最も関心の深い人物と思われる。

磯部は、山口県大津郡菱海村の農家の三男として生まれ、広島陸軍幼年学校を経て陸軍士官学校卒業とともに少尉任官、数年後中尉進級、さらに陸軍經理学校を卒業し、昭和10年には、村中孝次元陸軍歩兵大尉（以後、村中と略記）とともに「肅軍に関する意見書」

を執筆、頒布したため、ともに免官された。事件後は両名ともに「叛乱罪（首魁）」により刑死した。

橋川文三は、この二人については、

特に少年時から幼年学校・士官学校というコースをとった職業軍人の場合、使命（＝召命）への異常な多感性が発達するのは当然であった。そのさい、天皇＝大元帥のカリスマがその多感性の根源であったとあってよいであろう。

（『現代日本思想体系31』（筑摩書房刊）「解説 昭和超国家主義の諸相  
七 青年将校の場合」）

と職業軍人の使命の根源に天皇が位置していることを指摘している。

また、松本清張は『昭和史発掘』で、二人の相違について、

村中が「理論家」というのは関係者がひとしく認めている。彼は相沢公判対策で「相沢中佐の片影」を書き、直心道場から出てている「大眼目」には「相沢精神」の普及に筆をふるった。理論は不得手で、行動主義の磯部にはこれが不満である。そのため、磯部が村中と別居するという、ちよつとした分裂が生じる。

と言及している。

この「別居」については、磯部自身が『行動記』の中で、次のように記している。

十月末になって、余は思ふ処あつて、村中と別居して一戸を構へた。思ふ所といふのは、いよいよ蹶起の準備にとりかかる事だ。村中、渋谷（善助）が相沢中佐の片影、大眼目等の文書戦事務に熱中してゐるので、余は武力専門でゆかう、文書戦など如何にして見た所で、金が要るばかりだと言ふ至極簡単な考へから、文書戦事務から遠ざかつたのだ。余はどこまでも実力解決主義で、実力をつくること、然もその実力は軍隊を中心とした実力でなければいけないと考へたので自分一人ででも蹶起し得べく、田中勝の部隊を中心として実力編成に専念する事にした。

ちなみにともに獄中で記して遺した村中の「丹心録」のうち、北一輝の『日本改造法案

大綱』の「卷六 国民の生活権利のうち、国民教育の権利」に言及した部分と磯部の「獄中日記」とを引用し、両者の相違を確認しておきたい。

村中孝次「丹心録」（昭和11年7月15日午前誌）

不肖らは国防の危殆について深憂を抱きしものなり、兵力資材の充実一日も急を要することを痛感しあるものなり、しかれども尨大なる軍事予算を火事泥式に強奪編成して他を省みざるは、国家をいよいよ危うきに導き、国防をますます不安ならしむるものなり、軍幕僚のなすところかくのごとし。あるいは言う昭和十五年度より義務教育年限が八年に延長せらるる、これ君らの持論貫徹ならずやと。謬見もはなはだし。「日本改造法案大綱」には義務教育十年制を主張しあり、この十年とそれの八年と相似たりといえども、根本精神において転地の差あり、この十年は昼食、教科書官給の十年なり、貧困家庭の子弟といえども学び得る十年なり、その八年はドイツの義務教育年限を直訳受入れての八年なり、六年制においてすら地方農村は非常なる経営困難にして、職員に対する俸給不渡りに陥り、また弁当に事欠く欠食児童を多発しあるにあらずや、八年制の地方農山漁村に与うる惨害思い半ばに過ぐ、不肖らは傾来義務教育費全額国庫負担を主張し来たり、地方自治体はこれによりて大いに救わるべし、さらに一步を進めて教科書、昼食等を官給せば、児童とその父兄とはまた大いに救わるべし、しかる後に教育年限を八年とすべく十年とすべし。

磯部浅一「獄中日記」（昭和11年7月31日～8月31日）

七月卅一日

菱海 誌

明日は十五同志の三七日なり、余は連日祈りに日を暮す、唯こまることは、十五同志に対してはいかに祈る可きかがわからぬ事なり、成仏せよと祈つても彼等は「維新大詔の渙發せられ天下万民悉く堵に安んずるの日迄は成仏せじ」と言ひて死したるを以て、とても成仏しさうにもなし、「成仏するな迷へ」と言ふ祈りをするわけにもゆかず、ほとほと困る次第なり、余は茲に於て稀代なる祈りをする事とせり、「諸君強成の魂に鞭打ちて、最一度二月事件をやり直せ、新義軍を編成して再挙し、日本国中の悪人輩を討ち尽せ、焼き払え、日本国中に一人でも吾人の思想信念を解せざる悪人輩の存する以

上、決して退讓すること勿れ、日本国中を火の海にしても信念を貫け、焼け焼け、強火の魂となりて焼き尽せ、焼けても尚あきたらざれば、地軸を割りて一擲微塵にしてその志を貫徹せよ」と

夜に入り雷鳴電光盛ん、シュウ雨来る、一七日の夜と同じく陰気天地を蔽ふ、余は本記をなし村中は一念一信読経をなす、今や、天上維新軍は相沢司令官統率の下に將に第二維新を企図しあり、地上軍は速かに態勢を回復し戦備を急がざるべからざるを痛感す

八月一日

菱海入道 誌

何をヲッー、殺されてたまるか、死ぬものか、千万発射つとも死せじ、断じて死せじ、死ぬことは負ける事だ、成仏することは讓歩することだ、死ぬものか、成仏するものか

悪鬼となつて所信を貫徹するのだ、ラセツとなつて敵類賊カイを滅尽するのだ、余は祈りが日々に激しくなりつつある、余の祈りは成仏しない祈りだ、悪鬼になれる様に祈っているのだ、優秀無敵なる悪鬼になる可く祈っているのだ、必ず志をつらぬいて見せる、余の所信は一分も一厘もまげないぞ、完全に無敵に貫徹するのだ、妥協も讓歩もしないぞ

余の所信とは日本改造法案大綱を一点一角も修正することなく完全に之を実現することだ

法案は絶対の真理だ、余は何人と雖も之を評し、之を毀却することを許さぬ

法案の真理は大乗仏教に真徹するものにあらざれば信ずることが出来ぬ

然るに大乗仏教どころか小乗もジュ道も知らず、神仏の存在さへ知らぬ三文学者、輕薄軍人、道学先生等が、わけもわからずに批判せんとし毀たんする「〔ママ〕」のだ。

余は日蓮にあらざれども法案を毀る輩を法謗のオン賊と言ひてハバカラヌ

日本の道は日本改造法案以外にはない、絶対がない、日本が若しこれ以外の道を進むときには、それこそ日本の歿落の時だ

明かに言つておく、改造法案以外の道は日本を歿落せしむるものだ、如何となれば官僚、軍閥、幕僚の改造案は国体を破滅する恐る可き内容をもつてゐるし、一方高天ヶ原への復古革命論者は、ともすれば公武合体的改良を考へてゐる。共產革命か復古革命かが改造法案以外の道であるからだ

余は多弁を避けて結論だけを言つておく、日本改造法案は一点一角一字一句悉く真理

だ、歴史哲学の真理だ、日本国体の真表現だ、大乘仏教の政治的展開だ、余は法案の爲めには天子呼び来れども舟より下らずだ

#### 八月六日

一、天皇陛下 陛下の側近は国民を圧する漢奸で一杯でありますゾ、御氣付キ遊バサヌデハ日本が大変になりますゾ、今に今に大変なことになりますゾ、二、明治陛下も皇大神宮様も何をして居られるのでありますか、天皇陛下をなぜ御助けなさらぬのですか、三、日本の神々はどれもこれも皆ねむつて居られるのですか、この日本の大事をよそにして忙してゐる程のなまけものなら日本の神様ではない、磯部菱海はソナナ下らぬナマケ神とは縁を切る、そんな下らぬ神ならば、日本の天地から追いはらつてしまふのだ、よくよく菱海の言ふことを胸にきぎんでおくがいい、今にみろ、今にみろッ

#### 八月十一日

天皇陛下は十五名の無双の忠義者を殺されたのであらうか、そして陛下の周囲には国民が最もきらつてゐる国奸等を近づけて、彼等の云ひなり放題に御まかせになつてゐるのだらうか、陛下 吾々同志程、国を思ひ陛下のことをおもふ者は日本国中どこをさがしても決して居りません、その忠義者をなぜいぢめるのでありますか、朕は事情を全く知らぬと仰せられてはなりません、仮りにも十五名の将校を銃殺するのです、殺すのであります、陛下の赤子を殺すのでありますぞ、殺すと言ふことはかんたんな問題ではない筈であります、陛下のお耳に達しない筈はありません、御耳に達したならば、なぜ充分に事情を御究め遊ばしませんので御座いますか、なぜ不義の臣等をしりぞけて、忠烈な士を国民の中に求めて事情を御聞き遊ばさせぬので御座いますか、何という御失政ではありませう。

こんなことをたびたびなさりますと、日本国民は 陛下を御うらみ申す様になりますぞ、菱海はウソやオベンチャラは申しません、陛下の事、日本の事を思ひつめたあげくに、以上のことだけは申し上げねば臣としての忠道が立ちませんから、少しもカザらないで陛下に申上げるのであります

陛下 日本は天皇の独裁国であつてはなりません、重臣元老貴族の独裁国であるも断じて許せません、明治以後の日本は、天皇を政治的中心とした一君と万民との一体的立憲国であります、もつとワカリ易く申上げると、天皇を政治的中心とせる近代的民主

国であります、左様であらねばならない国体でありますから、何人の独裁をも許しません、然るに今の日本は何と言ふまでありませうか、天皇を政治的中心とせる元老、重臣、貴族、軍閥、政党、財閥の独裁の独裁国ではありませぬか、いやいや、よくよく観察すると、この特権階級の独裁政治は、天皇をさへないがしろにしてゐるのでありますぞ、天皇をローマ法王にして居りますぞ、ロボットにし奉つて彼らが自恣専断を思ふままに続けて居りますぞ

日本国の山々津々の民どもは、この独裁政治の下にあへいでゐるのでありますぞ。

陛下 なぜもつと民をごらんになりませぬか、日本国民の九割は貧苦にしなびて、おこる元気もないのでありますぞ

陛下がどうしても菱海の申し条を御ききとどけ下さらねばいたし方御座いません、菱海は再び陛下側近の賊を討つまでであります、今度こそは宮中にしのび込んでも、陛下の大御前ででも、きっと側近の奸を討ちとります

恐らく陛下は、陛下の御前を血に染めるほどのことをせねば、お気付き遊ばさぬのでありませう、悲しい事ではありますが、陛下の為、皇祖皇宗の為、仕方ありません、菱海は必ずやりますぞ

悪臣どもの上奏した事をそのままうけ入れ遊ばして、忠義の赤子を銃殺なされました所の陛下は、不明であられると言ふことはまぬかれませんが、此の如き不明を御重ね遊ばすと、神々の御いかりにふれますぞ、如何に陛下でも、神の道を御ふみちがへ遊ばすと、御皇運の涯てる事も御座ります

統帥権を干犯した程の大それた国賊どもを御近づけ遊ばすものでありますから、二月事件が起つたのでありますぞ、佐郷屋、相沢が決死挺身して国体を守り、統帥大権を守つたのでありますのに、かんじんかなめの陛下がよくよくその事情を御きはめ遊ばさないうで、何時迄も国賊の言ひなりになつて御座られますから、日本がよく治らないで常にガタガタして、そこここで特権階級がつけねらつてゐるのでありますぞ、陛下 菱海は死にのぞみ、陛下の御聖明に訴へるのであります、どうぞ菱海の切ない忠義心を御明察下さります様伏して祈ります、獄中不斷に思ふ事は、陛下の事で御座ります、陛下さへシツカリと遊ばせば、日本は大丈夫で御座居ます、同志を早く御側へ御よび下さい

八月廿八日

竜袖にかくれて皎々不義を重ねて止まぬ重臣、元老、軍閥等の為に、如何に多くの国



民が泣いてゐるか

天皇陛下 この惨憺たる国家の現状を御覧下さい、陛下が、私どもの義拳を国賊叛徒の業と御考え遊ばされてみられるらしいウハサを刑務所の中で耳にして、私共は血涙をしばりました、真に血涙をしばつたのです。

陛下が私共の拳を御きき遊ばして

「日本もロシヤの様になりましたね」と言ふことを側近に言はれたとのことを耳にして、私は数日間気が狂いました

「日本もロシヤの様になりましたね」とは将して如何なる御聖旨か俄かにわかりかねますが、何でもウハサによると、青年将校の思想行動がロシヤ革命当時のそれであると言ふ意味らしいとのことをソク聞いた時には、神も仏もないものかと思ひ、神仏をうらみしました

だが私も他の同志も、何時迄もメソメソと泣いてばかりはゐませんぞ、泣いて泣き寝入りは致しません、怒つて憤然と立ちます

今の私は怒髪天をつくの怒にもえてゐます、私は今は、陛下を御叱り申上げるところに迄、精神が高まりました、だから毎日朝から晩迄、陛下を御叱り申して居ります

天皇陛下 何と言ふ御失政でありますか、何と言ふザマです、皇祖皇宗に御あやまりなされませ

確かに村中の「丹心録」からは、諄諄と自らの正統性を説く冷静さを感じるが、磯部の「獄中日記」からは、次第に強くなる憤怒の焰に読む者が身を煽られるようである。橋川文三はこれらの文章について、その著作「テロリズム信仰の精神史」の一節で「あたかも大魔王ルチフェルのごとき呪詛と反逆のパトスにあふれ、村中のそれは冷徹な異端神学者の弁証によってつらぬかれている。そして、彼らの灼熱した頭脳から奔流する思想は、いずれもある絶対的な二律背反に激突して黒い焰の中に挫折している。」と記している。

また、事件当日、学習院初等科在籍であった11歳の三島は、前述「二・二六事件と私」の中で、

少年たちはかくてその不如意な年齢によつて、事件から完全に拒まれてゐた。拒まれてゐたことが、却つてわれわれに、その宴会の壮麗さをこの世ならぬものに想像させ、その悲劇の客人たちを、異常に美しく空想させたのかもしれない。

磯部浅一氏の「行動記」は、蹶起の瞬間をつぎのやうに述べてゐる。

「村中、香田、余等の参加する丹生部隊は、午前四時二十分出發して、栗原舞台の後尾より赤坂溜池を経て首相官邸の坂を上る。其の時俄然、官邸内に数発の銃声をきく。いよいよ始まつた。秋季演習の連隊對抗の第一遭遇戦のトツ始めの感じだ。勇躍する、喚起する、感慨たとへんにもなした。(同志諸君、余の筆ではこの時の感じはとても表し得ない、とに角言ふに言へぬ程面白い、一度やつて見るといい、余はもう一度やりたい。あの快感は恐らく人生至上のものであらう。)(河野司氏編「二・二六事件」)

——この人生至上の面白さには、しかし、あのとき少年たちの心に直感的に宿つたものと、相照応するものがあつたのではなからうか。

(1966(昭和41)年6月)「二・二六事件と私」)

と、特に磯部の「行動記」の「蹶起の瞬間」を引用し、自らの少年期に「その宴会の壮麗さをこの世ならぬものに想像させ、その悲劇的客人たちを異常に美しく空想」したことを印象的に書き記している。

こうした文章からすれば、よく似た境遇で、ほぼ同じ運命を辿った青年将校のうちでも、三島にとっては、「文書戦」に熱中する理論派の村中よりも、「実力解決主義」の行動派、磯部により一層の魅力を感じたのは明らかである。

ところで、三島は、先にふれた「道義的革命的論理－磯部一等主計の遺稿について」において、橋川文三の「テロリズム信仰の精神史」について、「橋川氏のこの論文は、テロリズム信仰の局面からする二・二六事件の分析としては、比類のないすぐれた業績である」としつつも、次の、

磯部の獄中の手記が、ほとんど『ヨブ記』を思わせるような凄まじい呪いを奔騰させており、悪鬼羅刹の面影をあらわしているのは理由なしとしない。それは、日本の国体論者が、その限界状況において、かえつて致命的な国体否定論者に転化する劇的な瞬間を記録している。

という一節に対しては、

磯部の遺稿の思想は、本質的にその道義革命的性格を貫通しつつ、最後に何ものかを

「待つてゐる」ところに特色がある。彼は決して自刃を肯んじなかつた。しかし、そのやうにして「待つこと」の論理的必然は、正に自刃と紙一重のところにあることを、つひに意識しなかつたやうに見えるのである。私には、同じ理由から、磯部が「致命的な国体否定論者に転化した」かどうかは疑問に思はれる。

と記して、橋川文三とは見解を異にしている。

いずれが結果として当を得たことになったのかどうか、歴史的資料に即して確認したいところであるが、残念ながら、磯部の「獄中日記」は、先に引いたとおり、昭和11年8月31日付けで途切れ、以降、処刑の翌昭和12年8月までの約1年間の日記は未だ不明である。

## 二 『英霊の声』

さて、先に述べたように、作品『英霊の声』(1966(昭和41)年「文芸」6月号発表)には、磯部の「獄中日記」の「8月廿八日」の一節が引用されている。

この「英霊」とは二・二六事件で刑死した青年将校(兄神)と第二次世界大戦末期の特別攻撃隊として出撃、戦死した兵士(弟神)を指しており、作品中の「私」が参加した「帰神の会」において、盲目の青年に憑り坐した彼らの、人間宣言をした天皇に対する憤怒と怨念の声を聴くという設定の物語である。

『日本もロシヤのやうになりましたね』

このお言葉を洩れ承った獄中のわが同士が、いかに憤り、いかに慨き、いかに血涙を流したことか！

二月二十六日のその日、すでに陛下は、陸軍大臣の拝謁の際

『今回のことは精神の如何を問はず、甚だ不本意なり、国体の精華を傷つくるものと認む』と仰せられた。

二十七日には、陛下はこのやうに仰せられた。

『朕が股肱の臣を殺した青年将校を許せといふのか。戒厳司令官を呼んで、わが命を伝へよ。速やかに事態を收拾せよ、と。もしこれ以上ためらへば、朕みずから近衛師団をひきいて鎮圧に当るであらう』

同じ日に、われらを自刃せしむるため、勅使の御差遣を願ひ出た者には、

『自殺するならば勝手に自殺させよ。そのために勅使など出せぬ』

と仰せられた。

(中略)

しかし、反逆の徒とは！ 叛乱とは！ 国体を明らかにせんための義軍をば、反乱軍と呼ばせて死なしむる、その大御心に御仁慈つゆほどもなかりしか。

こうした憤怒の声は、先ず「その軍服の胸は破れ、血に濡れてゐる。その胸は銃弾を以て破れたのではない。尽きせぬ怨みによつて破れ、今もなほ血を流してゐる」青年将校である兄神たちの霊たちの声として、続いて『われらに次いで、裏切られた霊である。第二に裏切られた霊である』ところの、「いずれも飛行服を召し、日本刀を携へ、胸もとの白いマフラーが血に染まつてゐる。」「身を弾丸として敵艦に命中させ」て死した神風特別攻撃隊員である弟神の霊も、

忠勇なる将兵が、神の下された開戦の詔勅によつて死に、さしもの戦ひも、神の下された終戦の詔勅によつて、一瞬にして静まつたわづか半歳あとに、陛下は、

『実は朕はにんげんであつた』

と仰せ出されたのである。われらが神なる天皇のために、身を弾丸となして敵艦に命中させた、そのわづか一年あとに…。

と憑り坐しを通じて語る。最後には兄神、弟神ともに加わつて

「ああ、ああ、嘆かわし、<sup>いきどお</sup>憤ろし」

「ああ」

「ああ」

「そもそも、<sup>りんげん</sup>綸言汗のごとし、とは、いづこの言葉でありますか」

「神なれば勅により死に、神なれば勅により<sup>いくさ</sup>軍を納める。そのお力は天皇おん個人のお力にあらず、皇祖皇宗のお力でありますぞ」

(中略)

されど、ただ一つ、ただ一つ、

いかなる強制、いかなる弾圧、

いかなる死の脅迫ありととも、  
陛下は人間となり仰せらるべからざりし。  
世のそしり、人の侮りを受けつつ、  
ただ陛下御一人、神として御身を保たせ玉ひ、  
それを架空、それをいつはりゆめ宣はず、  
(たとひみ心の裡深く、さなりと思すとも)  
祭服に玉体を包み、夜昼おほろげに  
宮中賢所のなほ奥深く  
皇祖皇宗のおんみたまの前にぬかづき、  
神のおんために死したる者らの霊を祭りて  
ただ斎き、ただ祈りてましまさば、  
何ほどか尊かりしならん。  
などてすめろぎは人間となりたまひし。  
などてすめろぎは人間となりたまひし。  
などてすめろぎは人間となりたまひし」

最後は、「ただ謔言のやうに畳句のみをくりかえし、」憑り坐しの青年の死で終わる。

長々と引用してしまっただが、見てきたとおり『英霊の声』の兄神は磯部の「獄中日記」などに代表される思想とほぼ同じ方向性を持っていることを確認しておきたいためである。

### 三 小説『憂国』の主題

さて、周囲の事情がある程度分明し、準備が整った感があるので、ここから本稿の主題である小説『憂国』の世界に分け入りたい。

まず、この小説の構成は、小説の段落というより演劇の場と呼んだほうが適っていると思われるように簡潔である。二・二六事件突発第三日目の夜、親友が叛乱軍に加入していることに対し「懊悩」を重ね、皇軍相撃の事態必至となる情勢に「痛憤」し、自宅において近衛歩兵一連隊勤武山信二中尉が割腹自殺を遂げ、麗子夫人もこれに殉じて自刃を遂げるといふ展開は、「壹」の状況設定、「貳」の二人の、軍人およびその妻としての覚悟に満ちた平素の生活、「参」の二人の「最後の営み」、「肆」の武山信二中尉の「割腹」、「伍」

の麗子夫人の自刃で終わる。中尉の「俺は今夜腹を切る」との死の覚悟に夫人が「覚悟はしておりました。お供をさせていただきたくございます」と応えて二人の愛の確認と、死に至る道筋は、他の登場人物も一切無く二人だけで完結しており、外部からの干渉も外部への干渉もなく、揺るぎ無い愛と死の世界が紆余曲折無く構築されている。実際、作品は「最後の営み」(愛)と武山信二中尉の「割腹」(死)の場面に多くを費やされている。また、三島自身の次のような言及もある。

- ① 作者自身が1965(昭和40)年に映画化した際、邦題はそのまま「憂国」、英語題は「THE RITE OF LOVE and DETH」(愛と死の儀式)としている。
- ② また、1966(昭和41)年5月「マドモアゼル」掲載の「憂国」では、

「憂国」は、いくつかの主題を持った映画ですが、そのもつとも大切な主題の一つは、夫婦愛といふことです。この、昭和十年代の青年将校夫妻は、教育勅語そのままの、「夫婦相和シ朋友相信ジ」といふモラルに忠実であるために、死ななければならず、死の中にだけ、永遠の愛を求め合ひます。

と映画「憂国」の主題を分かりやすく説明している。

- ③ さらに、1966(昭和41)年6月の「二・二六事件と私」の中でも、次のような言及がある。

「憂国」の中尉夫妻は、悲境のうちに、自ら知らずして、生の最高の瞬間をとらへ、至福の死を死ぬのであるが、私がかれらの至上の肉体的悦楽と至上の肉体的苦痛が、同一原理の下に統括され、それによつて至福の到来を招く状況を、正に、二・二六事件を背景にして設定することができた。

もしもう一晚待てば、皇軍相撃の事態は未然に防がれ、武山中尉にはかつての同志の一人として、たとへ司直の手は伸びても、このやうな死の必然性は薄れたにちがひない。死処を選ぶことが、同時に、生の最上のよろこびを選ぶことになる、このやうな稀な一夜こそ、彼らの至福に他ならない。しかもそこには敗北の影すらなく、夫婦の愛は浄化と陶酔の域に達し、苦痛に満ちた自刃は、そのまま戦場における名誉の戦死と等しい、至誠につながる軍人の行為となる。このやうな一夜をのがせば、二度と、人生には至福は訪れないといふ確信を、私はどこから得たのであろうか。

④ 先にも記したように「『花ざかりの森・憂国』解説」にも、

ここに描かれた愛と死の光景、エロスと大義との完全な融合と相乗作用は、私がこの人生に期待する唯一の至福であると云つてよい。しかし、悲しいことに、このやうな至福は、つひに書物の紙の上にはしか実現されえないのかもしれない。

という言及がみられる。

①～④の映画または小説「憂国」に関する作者自らの言及や思いを重ねなくとも、(いや、言及が存在する以上重ねてしまいがちであるので、注意深く参照するという姿勢で扱うのだが) 一読すれば「憂国」の青年将校の「愛」と「死」と理解できる。

#### 四 武山中尉の「懊惱」と「痛憤」

では、激しい「懊惱」と「痛憤」を経て割腹を決意するほどの「憂国」とはどのようなものか。

「廿八日の日暮れ時、玄関の戸をはげしく叩」いて帰宅した武山中尉は、

「俺は知らなかつた。あいつ等は俺を誘わなかつた。おそらく俺が新婚の身だつたのを、いたはつたのだらう。加納も、本間も、山口もだ」

麗子は良人の親友であり、たびたびこの家へも遊びに来た元気な青年将校の顔を思ひ浮かべた。

「おそらく明日にも勅命が下るだらう。奴等は叛乱軍の汚名を着るだらう。俺は部下を指揮して奴らを討たねばならん。……俺にはできん。そんなことはできん」

そして又言つた。

「俺は今警備の交代を命じられて、今夜一晚帰宅を許されたのだ。明日の朝はきつと、奴らを討ちに出かけなければならんのだ。俺にはそんなことはできんぞ、麗子」

と妻の麗子に心中を吐露するこの場面だけが「懊惱」と「苦惱」を唯一表している。

さて、しかし、「壹」の状況設定にある「事件発生以来親友が叛乱軍に加入せることに対」する「懊惱」は、「俺は知らなかつた。あいつ等は俺を誘わなかつた。新婚の身だつたのを、いたはつたのだらう」というのであるが、それでは何故こうした時代状況を認識

しながらも「新婚の身」となるのであるか？という素直な疑問が生じないだろうか？

三島によれば「現に二・二六事件の有志将校は二つの盟約を交はしてゐた。一つは、決して陸軍大学に進まないといふことであり、一つは妻帯しないといふことであつた。この小説の悲劇は、それにもかかはらず妻帯した青年将校が、妻を愛するあまりに計画から疎外されるところに原因があるのであるから、それだけのものが観客から感じられなければならない」と「製作意図及び経過（「憂国 映画版」）」で述べているが、「それにもかかはらず」という事情は小説中どこにも描かれていない。

三島の言うように未婚の者は「一つは妻帯しない」という「盟約を交は」しても「非常時」という認識からすれば不思議ではないが、史実の「蹶起」で主要な役割を務めた青年将校のなかには、下記のような既婚・結婚の例がある。

野中四郎陸軍歩兵中尉 1934（昭和9年）結婚（拳銃にて自決）

香田清貞陸軍歩兵大尉 既婚（首魁として死刑）

安藤輝三陸軍歩兵大尉 1931（昭和6年）結婚（首魁として死刑）

栗原安秀陸軍歩兵中尉 既婚（首魁として死刑）

他に「謀議参与又は群衆指揮」として死刑となった将校の中にも例があり、なかには結婚して2週間で「蹶起」という例もある。

対馬勝雄陸軍歩兵中尉 1934（昭和9年）12月結婚

丹生誠忠陸軍歩兵中尉 1935（昭和10）年結婚

坂井 直陸軍歩兵中尉 1936（昭和11）年2月9日結婚

田中 勝陸軍砲兵中尉 1935（昭和10）年12月25日結婚

こうした例を見ても男女の結びつきには、個人と個人の関係から発する事情のほか、まして、正式な社会的認知の発生する婚姻においては、各個人の所属する家の事情や社会的な事情も介在するのが常で、こうした特殊な事件に関わる当事者たちの、「蹶起」に至る過程や各自の思想や信念など、まさに各人各様であり、こうした史実の将校たちの未婚・既婚状況は、小説の解釈としては単なる参考程度であろう。

さて、小説中の、武山中尉と麗子夫人の場合は、結婚への過程もその事情もまったく描かれておらず、「麗子はほんの数ヶ月前まで路傍の男にすぎなかつた男が、彼女の全世界の太陽になつた」という件からすれば、恋愛の末の半歳前の「華燭の典」とは推測できない。それでは、見合い結婚の必要や事情が「蹶起」の半年前にあつたのか？

親友の「加納も、本間も、山口」も青年将校として「維新のための蹶起」の意志を固め、



準備を進めていたであろう。「蹶起」という行動は、「非常時」という認識、「維新」の論理がなければできないことではない。「たびたびこの家へも遊びに来た元気な青年将校」の親友たち、「ここでよく呑んだもんだなあ、加納や本間や野口」と「非常時」の認識について、「維新」の論理について、(「蹶起」については避けられたとしても)語り合わなかったのか。「親友」がそのような認識や論理を有することを知らないでいたのでは迂闊の謬りを免れないのではないか。では、知りつつも「それにもかかはらず」「華燭の典」を挙げる事情があったのか。「懊悩」のため割腹する潔い青年将校は、「新婚の身だつたのを、いたは」られたわが身の上について、何をどのように考えたのだろうか。

次に「皇軍相撃の事態必至となりたる情勢」に対する「痛憤」はどうだろう。

「おそらく明日にも勅命が下るだらう。奴等は叛乱軍の汚名を着るだらう。俺は部下を指揮して奴らを討たねばならん。……俺にはできん。そんなことはできん」という「痛憤」は、「叛乱軍の汚名を着る」親友を勅命の下に討たねばならないことはもちろん正しく「痛憤」であるのだが、「維新のための蹶起」が、何故「叛乱軍」の汚名を着せられるに至ったのか……いったい「維新」とは何のためか、親友たちは何を理想として求めたのか、そのように考えての「蹶起」が「叛乱」と何故解されたのか、事件の渦中にどのようなダイナミクスが働いたのか、親友の叛乱軍の汚名をそそがなくてよいのか、そうしたことについての思考はどこにも表現されていない。

ただ、麗子夫人の眼を通して、「二月二十六日の朝」、家を出て、「二十八日の夕刻」帰宅した武山中尉の様子が、以下のように描かれているところからその「懊悩」と「痛憤」に憔悴した二日間を推するほかはない。

明るい灯火の下で見る良人の顔は、無精髭に覆はれて、別人のやうにやつれてゐる。頬が落ちて、光沢と張りを失っている。期限のよいときは帰るなりすぐ普段着に着かへて晩飯の催促をするのに、軍服のまま、卓袱台に向つて、あぐらをかいて、うなだれてゐる。

一方、史実の青年将校たちには、「皇軍相撃」という事態について同様に切歯憤激する激しい「痛憤」があった。戒嚴司令部の包囲のなかで、「皇軍相撃」の事態になりつつある情勢下の、安藤大尉の様子を磯部の「行動記」に見てみる。

歩三大隊長、伊集院少佐来り「安藤、兵が可哀相だから、兵だけは帰してやれ」と言へば、安藤は憤然として、「私は兵が可哀相だからヤツタのです。大隊長がそんな事を言ふと癪にさはります」と、不明の上官に鋭い反撃を加へ、突然怒号して「オーイ、俺は自決する、さして呉れ」と、ピストルをさぐる。余はあわてて制止したが、彼の意はひるがへらない。死なして呉れ、オーイ磯部、俺は弱い男だ、今でないと死ねなくなるから死なして呉れ、俺は負けることは大嫌ひだ、裁かれることはいやだ、幕僚共に裁かれる前に、自ら裁くのだ、死なして呉れ」と制止の余を振り放たんとする。悲劇、大悲劇、兵も泣く、下士も泣く、同志も泣く、涙の洪水の中に身をもだえる群集の波。

大隊長も亦「俺も自決する、安藤の様な立派な奴を死なせねばならんのが残念だ」と言ひつつ号泣する。「中隊長が自決なさるなら、中隊全員お伴を致しませう」と、曹長が安藤に抱きついて泣く。

「オイ前島上等兵(?)お前が、かつて中隊長を叱つてくれた事がある。中隊長殿、いつ蹶起するのです、此儘でおいたら農村はいつ迄たつても救へませんと言つてねえ、農村は救へないなあ、俺が死んだらお前達は堂込(?)曹長と○○曹長とを助けて、どうしても維新をやりとげよ、二人の曹長は立派な人間だ、イイカ、イイカ」「曹長、君達は僕に最後迄ついて来て呉れた、有難う。後を頼む」と言へば、群がる兵士等が『中隊長殿、死なないで下さい』と泣き叫ぶ。余はこの将兵一体、鉄石の如き団結を目のあたりにみて、同志将兵の偉大さに打たれる。

「オイ安藤ッ、死ぬるのはやめろ、人間はなあ、自分が死にたいと思つても神が許さぬ時には死ねないのだ。自分でも死にたくなくても時機が来たら死なねばならなくなる。こんなにたくさんの人が皆止めてゐるのに死ぬるものか。又、これだけ尊び慕ふ部下の前で、貴様が死んだら、一体後はどうなるんだ」と、余は羽交じめにしてゐる両腕を少しく緩めてさとす。幾度も幾度も自決を思ひ止まらせやうとしたら、漸く自決しないと云ふので、余は扼してゐた両手を解いてやる。

兵は一同に集まつて中隊長に殉じやうと準備してゐるらしい様子、死出の歌であらう、中隊をたたへる「吾等の六中隊」の軍歌が起る。

また、磯部自身も同じ「行動記」の中で、

深更、二十七日午前、戦時警備令が下令され、吾が部隊がこの中に編入された事を

知る。払暁戒嚴令の宣布をきき、我が部隊が令下に入りたるを確知し、余は万歳を唱へた。

この頃、帝国ホテルにて満井、亀川（哲也）等と会ひたる村中帰来し、「同志部隊を歩一に引揚げやう。皇軍相撃は何と言つても出来ぬ」と言ひて同志にはかる。余は激語して反対する。「皇軍相撃が何だ、相撃はむしろ革命の原則ではないか、若し同志が引揚げらば、余は一人にても止りて死戦する」の旨を主張した。

若し状況悪化せば、余は田中隊と、栗原部隊を以て出撃し、策動の本拠と目さるる戒嚴司令部をテン覆するの覚悟を以て陸相官邸を去り、首相官邸に陣取る。

と、「皇軍相撃」の覚悟を固めている。安藤中尉の悲憤は「兵が可哀相そうだから」、また「農村は救へないなあ」という片言隻語に農村出身の兵卒への思いや農村の疲弊困窮という認識が垣間見られ、磯部の覚悟は「維新」成就に命を賭した断固とした決意を感じる。

このように比べてみると三島の描く武山中尉の「懊惱」や「痛憤」については「無精髭」や「頬が落ちて、光沢と張りを失っている」顔を通じてその葛藤の跡を表しているものの、具体的な認識や論理は描写されておらず、というより、描写せず、描写しないことで、武山中尉と夫人の麗子との「愛」と「死」に集中し、この二つが鮮烈な印象となっている。つまり、武山中尉に対して磯部や安藤のような「切齒憤激」の内容を具体的に求めるのは的外れ、無いものねだりということになる。

かくして、文学としての『憂国』の武山中尉と史実の青年将校との径庭は当然あるわけである。その最大の相違は、「新婚の身だつたのを、いたは」られて事件の当事者ではなかった蚊帳の外（!?）の「外伝」中の人物と、事件渦中の刻々と動くダイナミクスの中で現実と切り結ばねばならなかった人物との相違ではなかろうか。

その結果、武山中尉が「最後の営み」のため、「妻の来るのを待つてゐる」二階は、

窓の外に自動車の音がする。道の片側に残る雪を蹴立てるタイヤのきしみがきこえる。近くの塀にクラクションが反響する。……さういふ音をきいてみると、あひかはらず忙しく往来している社会の海の中に、ここだけは孤島のやうに屹立して感じられる。

という、生活臭のする猥雑な現実と隔絶する世界である。また、その後の「腹を切る」支度を始める直前にも同様の描写がある。

このあたりの夜はしんとして、車の音さへ途絶えてゐる。四谷駅界隈の省線電車や市電の響きも、濠の内側に届するばかりで、赤坂離宮のひろい車道に面した公園の森に遮られ、ここまでは届いてこない。この東京の一画で、今も、二つに分裂した皇軍が相對峙してゐるといふ緊迫感は嘘のやうである。

娘を売らねばならぬ農村の疲弊も国民の困窮も叛乱將校の苦惱も軍閥幕僚の思惑の絡む緊迫した現実も届かない世界である。

こうした状況の設定、すなわち虚構にこそこの小説の文学性が垣間見られるのではないだろうか？

史実の青年將校が、維新の成就か逆賊の汚名か、原隊復歸か皇軍相撃か、自決か裁判闘争か、生か死か、両極を揺れ動く状況に翻弄されて抗することもできず、激しい呻きを上げざるを得ない、選択の不可能な状況と、予期せぬ事態、意図せぬ干渉をもたらす外部となんら関わり無く、静謐のうちに自らの主体に拠って愛と死の選択が可能である状況を對比すると、激しい現実の渦の外に身を置くことになる「新婚の身の上」という設定がいかに「虚構」の要のキーワードであることか、が見て取れる。

ところで、「愛」と「死」の場面は絢爛豪華とも言うべき描写が細部にわたって鏤められているが、小説のタイトルでもある「憂国」については、状況設定の「壹」で「事件發生以来親友が叛乱軍に加入せることに對し懊惱を重ね、皇軍相撃の事態必至となりたる情勢に痛憤」と記されているものの、国を憂うの「憂」という字は、本文中に二度しか現れていない。

一度は、「二人が死を決めたときのあの喜び」を反芻して、

二人が目を見交はして、お互いの目のなかに正当な死を見出したとき、ふたたび彼らは何者も破ることのできない鉄壁に包まれ、他人の一指も触れることのできない美と正義に鎧はれたのを感じたのである。中尉はだから、自分の肉の欲望と憂国の至情のあひだに、何らの矛盾や撞着を見ないばかりか、むしろそれを一つのものと考へることさへできた。

と自らの「自分の肉の欲望」つまり「愛」が「最後の営み」として「死」と「憂国の至情」と「何らの矛盾や撞着を見ないばかりか、むしろそれを一つのもの」になると確認する場

面である。

二度目は、麗子夫人が床に来るのを待ちながら、「肉の欲望が死に向かつてゐるやうに」に感じ、

自分が憂へる国は、この家のまはりに大きく雑然とひろがつてゐる。自分はそのために身を捧げるのである。しかし自分が身を滅ぼしてまでも諫めようとするこの巨大な国は、果たしてこの死に一顧を与へてくれるかどうかわからない。それでいいのである。

ここは華々しくない戦場、誰にも勲しを示すことのできぬ戦場であり、魂の最前線だった。

と、国を憂へるがための割腹死は、「華々しくない戦場、誰にも勲しを示すことのできぬ戦場であり、魂の最前線」と同様のものと確認する場面である。

一度目は「愛」に軸足があり、二度目は「死」に軸足を置いているが、両度とも、自らの「憂国」は「愛」と「死」と一つとなり、「美と正義」の、「魂」がもたらすものである。日本の農村の窮状を救えない悲しみや、そのための維新を成就できない無念や、元老重臣幕僚等の君側の討奸ができない憤怒にも、叛乱軍となった親友の汚名の雪辱などは、この魂にとってもはや形而下の出来事かもしれない。

三島は、こうした魂（三島の言う、「文学的」ではなく、橋川文三の「精神的興味」の文脈での「精神」）を描いたのであろう。小説の内実として、当時の日本の困窮する時代背景や生活に汲々とせざるを得ない人間、男女の日常における虚実へ渡る愛や恋、確執などの感情などには一顧も与えず、ひたすらこの「魂」の王国を描くことで、「死」に憧れてやまぬ自らの「精神」を描いたのではないだろうか。

……たしかに二・二六事件の挫折によって、何か偉大な神が死んだのだつた。当時十一歳の少年であつた私には、それはおぼろげに感じられただけであつたが、二十歳の多感な年齢に敗戦に際会したとき、私はその折の怖ろしい残酷な実感が、十一歳の少年時代に直感したものと、どこかで密接につながつてゐるらしいのを感じた。それがどうつながつてゐるのか、私には久しくわからなかつたが、「十日の菊」や「憂国」を私に書かせた衝動のうちに、その黒い影はちらりと姿を現はし、又、定かならぬ形のまゝに消えて行つた。

それを二・二六事件の陰画とすれば、少年時代から私のうちに育まれた陽画は、蹶起将校たちの英雄的形姿であつた。その純一無垢、その果敢、その若さ、その死、すべてが神話的英雄の原型に叶つており、かれらの挫折と死とが、かれらを言葉の真の意味におけるヒーローにしてゐた。

(中略)

少年たちはかくてその不如意な年齢によって、事件から完全に拒まれていた。拒まれたことが、却つてわれわれに、その宴会の壮麗さをこの世ならぬものに想像させ、その悲劇の客人たちを、異常に美しく空想させたのかもしれない。

(前出「二・二六事件と私」)

という、二・二六事件の青年将校に対する11歳の三島少年の憧憬を描く41歳の三島の回想は、次の作家の回想と対比させれば、その「精神」が明らかであろう。

1909(明治42)年生まれの太宰治は「苦悩の年鑑」において、二・二六事件について、次のように言及している。事件発生の1936(昭和11)年当時、27歳。執筆は昭和22年と推察されているので、38歳での回想の認識である。11歳と27歳とに感性や認識の懸隔はあつて当然である。

満洲事変が起つた。爆弾三勇士。私はその美談に少しも感心しなかつた。

私はたびたび留置場にいれられ、取調べの刑事が、私のおとなしすぎる態度に呆れて、

「おめえみたいなブルジョアの坊ちゃんに革命なんて出来るものか。本当の革命は、おれたちがやるんだ。」と言つた。

その言葉には妙な現実感があつた。

のちに到り、所謂青年将校と組んで、イヤな、無教養の、不吉な、変態革命を凶暴に遂行した人の中に、あのひとも混つていたような気がしてならぬ。

同志たちは次々と投獄せられた。ほとんど全部、投獄せられた。

中国を相手の戦争は継続している。

×

私は、純粹というものにあこがれた。無報酬の行為。まったく利己の心の無い生活。けれども、それは、至難の業であつた。私はただ、やけ酒を飲むばかりであつた。

私の最も憎悪したものは、偽善であった。

×

キリスト。私はそのひとの苦悩だけを思った。

×

関東地方一帯に珍しい大雪が降った。その日に、二・二六事件というものが起った。

私は、ムツとした。どうしようと言うんだ。何をしようと言うんだ。

実に不愉快であった。馬鹿野郎だと思った。激怒に似た気持であった。

プランがあるのか。組織があるのか。何も無かった。

狂人の発作に近かった。

組織の無いテロリズムは、最も悪質の犯罪である。馬鹿とも何とも言いようがない。

このいい気な愚行のにおいが、所謂大東亜戦争の終りまでただよっていた。

「苦悩の年鑑」(1947(昭和22)年刊行『冬の花火』収録)

## 五 「麗子」という日本？

最後に、もう一人の登場人物、中尉の愛の対象である夫人の麗子にも言及しておきたい。

「最後の営み」の際、「お前の体を見るのもこれが最後だ、よく見せてくれ」と言う武山中尉の目に映る麗子は、「白い肉の起伏」「富士額のしづかな冷たい額」、「白い喉元」、「山桜の蕾のやうな乳首」、「その腹と腰の白さと豊かさ」、「白い揺蕩していた肉体」、「二本の白い指」という「白」い色が鏤められている。

また、「最後の営み」の後は、第四章の割腹の場面であるが、その直前には、麗子は「白無垢の一揃え」に着替えるのだが、その後も、「白無垢」または「白」は、という語は、「白無垢の姿」、「筆を持つ妻の白い指」、「白無垢の帯」、「妻の白無垢の姿の美しさ」「すべてが白いので、唇に刷いた薄い紅が大そう艶やかに見える。」、「その白いなよやかな風情」と続き、

中尉は目の前の花嫁のやうな白無垢の美しい妻の姿に、自分が愛しそれに身を捧げてきた皇室や国家や軍旗や、それらすべての花やいだ幻を見るやうな気がした。それらは目の前の妻と等しく、どこからでも、どんな遠くからでも、絶えず清らかな目を放つて、自分を見詰めてみてくれる存在だった。

という存在となる。

ここで、大仰な気がしないでもない。「花嫁のやうな白無垢の美しい妻の姿」に「皇室」、「国家」「軍旗」という「花やいだ幻」を見ると中尉の目は、精神は、いったい何ものであろうか？「憂国」と一つになった「愛」と「死」の、「美と正義」の「精神」または「文学性」であろう。

続いて、いよいよ武山中尉の腹を刃が切り裂くと、「ついに麗子の白無垢の膝に、一滴の血が遠く小鳥のように飛んで届いた。」、さらに中尉の流した「血の中を膝行して近寄ったので、白無垢の裾は真紅になった。」

もっとも「白」は、麗子だけではなく、中尉も「刀身に白布を巻きつけ」、「六尺の禪の純白が覗き」、「軍刀の白布の握りを把」り、「白布も拳もすっかり血に濡れそぼっている。」と「白」い色が強く焼き付けられ、両者の白い地に真紅の血の色が鮮やかに染まる。「白地に赤く日の丸染めて……」と歌い出される、1911（明治44）年、「文部省著『尋常小学唱歌 第一学年用』国定教科書」初出の「日の丸」を思い出さぬでもないが、むしろ「白」という色の持つ、「清潔」「清楚」「純潔」といつた方向の表象も想像される。

こうした「白」を基調として、一方で、麗子の肉体的な特徴への言及として、「富士額」、「山桜の蕾」があり、……そういえば夫人の「唯一のコレクション」である「小さな陶器の犬や兎や栗鼠や熊や狐」「小さな壺や水瓶」は富士や桜の美しい、潔い日本という国土に棲む小動物、ささやかな生活の道具の象徴とすれば、麗子は優しく中尉を包む日本の美をそこはかたなく漂わせ、象徴しているということになる。

ただ、映画『憂国』では、犬や栗鼠などに混ざって見慣れない巻角の羊やペンギンの小さな人形も置かれてあり、日本を象徴させるのであれば、日本書紀に現れる羊はともかくとしてもペンギンの配置には違和感を抱いた。この「小動物のコレクション」は、他用でロンドンに滞在した三島が「日本では思はしいものが見つからず、ロンドンの町の暗いショーウインドからショーウインドへさがしまはつて、やつと気に入るものを得た」という記載が「製作意図及び経過（『憂国 映画版』）」にある。また映画『憂国』の「撮影台本」では、麗子が「胸に抱いた陶器の栗鼠、突然、床に落ちる」、「落ちて割れた陶器の栗鼠」というシーンがあったり、中尉が切腹し息絶えて俯伏せに倒れると、軍帽が脱げて転がり、といったプランが他のスタッフから提案されたということであり、映画では視覚的な効果をもたらすための工夫があちこちにみられ、小説とは異なりがあると理解せざるを得ない。



さらには、「撮影台本」中の麗子像は、

麗子の髪、夕日にもえる林のように燃え立つ

黒バックに白百合のやうにかかげられた麗子の五本の指。

三分の二に、麗子の白鳥の如き咽喉。中尉の影これに近づく。

黒バックに雪山のごとくかがやく一つの乳房。

といった描写が「最後の営み」の場面に応じてなされ、性的な形容にも少し及び、小説の麗子像とは多少の異なりを示してくる。こうした「撮影台本」も重ねると、三島が麗子夫人を「日本」を象徴させたと考えるのは難しく思われる。

が、映像と小説は分離するとすれば、小説の麗子像としては、本節のタイトルに「？」を付しつつ一応提示しておきたい。

ところで、三島は、「愛国心」という文章で、

実は私は「愛国心」という言葉があまり好きではない。何となく、「愛妻家」といふ言葉に似た、背中ゾツとするやうな感じをおぼえる。

(中略)

日本のやうな国には、愛国心などいふ言葉はすぐはないのではないか。すつかり藤猛にお株をとられてしまつたが、「大和魂」で十分ではないか。

アメリカの愛国心といふのなら多少想像がつく。ユナイテッド・ステーツといふのは、巨大な観念体系であり、移民の寄せ集めの国民は、開拓の冒険、獲得した土地への愛着から生じた風土愛、かういふものを基礎にして、合衆国といふ観念体系をワシントンにあづけて、それを愛し、それに忠誠を誓ふことができるのであらう。国はまづ心の外側にあり、それから教育によつて内側へはひつてくるのであらう。

アメリカと日本では、国の観念が、かういふ風にまるでちがふ。日本は日本人にとつてははじめから内在的即自的であり、かつ限定的個別的具体的である。観念の上ではいくらでもそれを否定できるが、最終的に心情が容認しない。

そこで日本人にとつての日本とは、恋の対象にはなりえても、愛の対象にはなりえない。われわれはとにかく日本に恋してゐる。これは日本人が日本人に対する基本的な心情の在り方である。(本当は「対する」といふ言葉さへ、使はないほうがより正確なの

だが) しかし恋は全く情緒と心情の領域であつて観念性を含まない。

(1963 (昭和43) 年 1 月朝日新聞初出)

と書いているが、武山中尉の精神、麗子夫人に対する姿勢は「愛妻家」ではなく、「憂へる国」に対する精神は「愛国心」ではなく、この「大和魂」の「内在的即自的」な「情緒と心情」という性格が強く刻印されている気がしてならない。

付表：三島由紀夫の小説『憂国』に関する年表

(出来事以外は、「三島由紀夫全集 新潮社 補巻1」掲載の「年譜」に拠る。)

注) ただし、上記「年譜」に掲載されていない文章については、※を付し補足して記載した。

年	三島由紀夫	出来事
昭和11年 (1936) 2月	11歳 学習院初等科5年	二・二六事件
昭和16年 (1941) 9月～12月	16歳 ペンネーム「三島由紀夫」を用い始める。	真珠湾攻撃
昭和18年 (1943) 12月	18歳	徴兵検査年齢を1年引き下げ
昭和20年 (1945) 2月 5月 8月15日	20歳 入隊検査に際し軍医の誤診により即日帰京を命じられる。 勤労働員で神奈川県海軍高座工廠の寮に入る。 発熱のために、一家が移っていた豪徳寺の親戚の家に帰っていて、そこで終戦を知る。	天皇、「終戦の詔書」をラジオ放送
昭和21年 (1946) 1月	21歳	天皇、詔書を官報に掲載 (所謂「人間宣言」)

11月		日本国憲法公布
昭和36年 (1961)	36歳	
1月	『憂国』を発表。	
8月19日	『十日の菊』脱稿。	
11月	「十日の菊」文学座により初演。	
昭和38年 (1963)	38歳	
1月～5月	「私の遍歴時代」を東京新聞に連載。	
昭和40年 (1965)	40歳	
1月16日	「憂国」のシナリオ脱稿。	
4月	自作自演の短編映画「憂国」完成。	
昭和41年 (1966)	41歳	
1月	映画「憂国」フランス・ツール国際短編映画祭で次点となる。	
4月	映画「憂国」アート・シアター系で封切。 『英霊の声』発表、刊行。	
6月	※「二・二六事件と私」発表。	
昭和42年 (1967)	42歳	
3月	「『道義的革命』の論理—磯部一等主計の遺稿について」発表。	
昭和43年 (1968)	43歳	
2月	「二・二六事件—“日本主義”血みどろの最期」発表。	
昭和45年 (1970)	45歳	
6月11日	「盾の会」の歌「起て！紅の若き獅子たち」を作詩し、「英霊の声」の朗読とともにクラウン・レコードに吹き込む。	

研 究 紀 要

第58・59合併号

平成25年 2月25日 印刷

平成25年 2月28日 発行

編集発行 高 松 大 学  
高 松 短 期 大 学  
〒761-0194 高松市春日町960番地  
TEL (087) 841-3255  
FAX (087) 841-3064

印 刷 株式会社 美巧社  
高松市多賀町1-8-10  
TEL (087) 833-5811